

# 令和3年度 青梅市立吹上中学校 学校評価シート

## 〈学校経営方針の重点〉

- 1 確かな学力の向上（知）
- 2 豊かな心の育成（徳）
- 3 健やかな体の育成（体）
- 4 地域に根ざした学校づくりの推進

※評価 A(高度に達成) B(おおむね達成) C(達成するにはもう一歩) D(ほとんど未達成)

項目	経営目標	本年度の重点	具体的な方策	評価	分析結果	改善策	学校関係者評価		学校の見解と今後の方向性
							評価	コメント	
学力の向上	発展的な学習の充実 きめ細かい指導を徹底し、指導方法の工夫と改善を図る。		生徒のよい点や可能性を見付け、伸ばす指導の工夫を行う。	B	個々の生徒への対応を十分に行うことができた。また情報端末の導入により、課題の提示や記録の把握をしやすくなり、指導に生かすことができた。	新学習指導要領の理念に基づき、さらに個に応じた指導を深める必要がある。生徒の学習の状況を情報端末で確認したり、授業への活用を拡充したりしていく。	A	コロナ禍の指導は大変である。その状態でも学校が最大限努力していることや保護者の満足度が十分伝わる。端末活用は生徒もよく理解し、効果的に行われている。成果をあげているのに、教員の評価が厳しすぎる。A評価が妥当である。	制限された状態で生徒の成長のために何が出来るかを追求することができた。さらに個に応じた指導を充実させ、生徒のよい点や可能性を伸ばすために、更なる指導の工夫を行う。教員の評価が厳しいと指摘を受けたので、評価基準を再確認する。
			めあて、課題、まとめ、振り返りを適切に設定した授業を行い、生徒の主体的な学びを促す。	B	めあてを示し、課題設定、思考、まとめの流れを設定することで、生徒が学習に向かう姿勢を強めることができた。	さらに、自ら課題を設定したり、多面的・多角的な思考を身に付けさせることで、より主体的な学びにつなげたい。	B	生徒が学習に向かう姿勢を強めることができたことは評価できる。さらなる主体的な学びに期待したい。	指導計画を丁寧に練り、学びが深いある課題設定を行い、生徒の主体的な学びを育成する。
			生徒が自分の考えを表現したり、他と比べたりしながら、自分の考えを再構築する場面を設定する。	A	コロナ禍により直接の話し合いの場面は設定しづらかったが、一人一台の情報端末を使用することで、自分の意見を発表しやすくなり、より多くの人の意見と比べることができた。	授業の中で、情報端末を用いて議論ができたり、学習成果を発表できる場面をより多く設定していく。	A	一人一台の端末利用が学習や意見の発表のしやすさ等に役立っていることが生徒・保護者の評価からうかがえる。生徒は主体的に端末を活用している。	感染対策を講じながらも意見交換ができる環境は整っているため、対面での活動が制約されてもICT機器を活用し、生徒の活動を充実させて、生徒の思考を豊かに育んでいく。
			基礎的・基本的内容を繰り返し行い、粘り強く学習する力を育むために、一人一台の端末を活用し、主体的に家庭学習を行う意欲を育む。	B	家庭学習については生徒によって差がある。端末を使用し、持ち帰られるようになって、より充実した活動を行うことができていない生徒もいる。しかし、端末を持つことで、インターネットなど他のことに使用してしまい、学習の妨げになっている生徒もいる。	端末の有効な使い方、正しい使い方を継続して指導していく。授業中および家庭学習への活用では、適切な場面で使えるように指導し、紙ベースでの学習の方が有効な場合は、そちらを利用するようにしていく。	B	コロナ禍でも学校が生徒のことを考えて取り組んでいることが分かる。家庭学習については、生徒・保護者ともに評価が低いため、今後も保護者と共通認識を図り、協力を仰ぐことがさらに必要。端末のより良い利用を期待したい。	家庭で粘り強く学習する習慣を身に付けることは喫緊の課題である。保護者と一緒に学力向上について考える場を設け、学校・家庭が一体となって取り組んでいく必要がある。また、クラウド型学習教材を継続して活用し、家庭学習の充実を図る。
豊かな心	生徒の社会性を尊重した人権教育を推進し、思いやり、認め合い、支え合う指導を充実させる。	いのちを大切にすることを根絶し、思いやり、認め合い、支え合う指導を充実させる。	道徳科の指導に工夫をしたり、現在の課題について広い視野からの報道等を活用したりすることで、こころの教育を充実させる。	B	各学年、道徳の授業にて、命の大切、思いやり、認め合い互いに支え合うことの大切さを繰り返し学んだ。3学年では受験期を前に、本当に辛い時のヘルプの出し方を教材として扱った。	話し合い活動を行うことが制限され、自分の考えをまとめるのに困惑する場面があった。自分の意見を発表したり、ほかの生徒の意見を聞き考えたり、認め合う場面をICT機器を活用する等、さらに工夫して増やす。普段の生活や行事を取り上げ、生徒が身近に感じ学ぶことができるよう工夫する。	B	学校や家庭で最も大切な、命の大切さや思いやり、互いに認め合い、支え合うことを道徳科で学べたことはとても良かった。	授業形態の課題は、感染対策を講じながらICT機器を活用し、話し合い活動ができるように工夫していく。また、担任のみではなく、全ての教員が道徳科の授業に触れる機会を整え、生徒が多様な考えに触れる機会を増やす。さらに、読書の習慣をより一層推進していき、心の教育の充実を図る。
			学校いじめ防止基本法に則り、いじめアンケートを活用し、いじめの未然防止・早期発見・解決を図る。	A	いじめアンケートを年4回実施した。些細なことでも担任が丁寧に聞き取りを行い、早め早めから対処することができた。生徒の中にもいじめ防止に対する意識が高いことを感じる。未然防止の取組として、弁護士によりいじめ防止講演を行った。法律の視点から、いじめは絶対に許されるものではないことを学ばせることができた。	アンケートだけでなく、普段から生徒の目線に立った指導を行い、些細なことでも教員間で情報共有を図ることを継続する。教科担任、学年教員、生活指導部が日頃から密にコミュニケーションをとっていくことを継続する。未然防止のための指導の工夫を行う。	A	いじめアンケートの活用はありがたい。生徒がいじめ防止について高い意識をもつことは必要かつ大切。早期発見早期対応等、学校が努力していることはとても伝わる。今後も防止対策をお願いしたい。	いじめの早期発見、早期対応ができるように、週一回のいじめ対策委員会において情報交換をさらに徹底する。教員による休み時間の見守りを継続し、生徒同士のトラブルを未然に防ぐ体制を整える。いじめと認知しない事案でも、見守りを続け、軽微な変化も見逃さない雰囲気をつくる未然防止のために、いじめを許さない心と態度を育成する。
			規範意識の醸成、あいさつの励行、礼儀作法の徹底を図り、生徒の社会性を育む。	A	朝礼や朝学活、授業の開始などのあいさつをしっかりと行っている。また、体育の授業では年間を通して正しい姿勢や礼法について指導を行ってきた。挨拶については生徒会本部が実施したアンケートによると、80%の生徒が教員や来校者に対して「自分から先に挨拶をする」と回答した。	全校生徒が一同に会する朝礼や儀式的行事が少なく、教室にて放送朝礼等を行う機会が多くなっているが、礼法指導は変わらず徹底する必要がある。挨拶アンケートは生徒の自己評価が高い。生徒会本部では「質の高いあいさつ5か条」を作成し呼びかけを続ける。	A	あいさつは生活の基本。生徒・保護者アンケートで90%以上の高評価を得ていることは素晴らしい。講演会や出張授業等で外部から来た方々が、生徒の礼儀正しさに感心していた。学校訪問時にも生徒から挨拶をされうれしく感じる。生徒の様子から、規範意識の高さがうかがえる。	生徒が「あいさつ」について考え、全校生徒にアンケートを取り、意見を聴いたり、傾向を観察したりしながら、自分たちの力で笑顔とあいさつの溢れる吹上中をつくらうと取り組み始めたことが、今年度の最大の成果である。生徒の主体的な活動をさらに推進し生徒の社会性を育む。
			新型コロナウイルス流行に影響された恐怖を受け止め、正しく予防をさせることで、思いやり、支え合う心を育む。	B	学校だより、保健だよりなどで正しい情報と知識を生徒に伝えることで、生徒の不安を取り除き、過剰な恐怖を持たないように指導することができている。消毒や換気などの対策を行い、生徒の感染防止に努めている。	引き続き、感染予防を行いながら、生徒の教育活動を充実させていく。生徒が正しい知識をもつことで、生徒が感染者や、濃厚接触者になった場合でも慌てることなく行動し、お互いが思いやり、支え合い差別なく生活できるようにしていく。	A	感染症予防対策は学校が徹底している、生徒もしっかり守っていると感じた。各種たいさつは必要かつ大切。早期発見早期対応等、学校が努力していることはとても伝わる。今後も防止対策をお願いしたい。	学校は安心して登校できると思っている生徒が多い。コロナ禍でお互いを思いやり、支え合う心が育っていると感じている。保護者・生徒のアンケートも高評価で生徒・保護者が安心して居るのが伝わるのでA評価が妥当。
健やかな体	心身ともに健康でたくましい生徒の育成	心身の健康を推進させるとともに、生徒の居場所づくり、きずなづくりを推進し、不登校の未然防止を図る。	新型コロナウイルス感染防止対策を適切に行うことで、自分と他人の健康を守る態度を養う。	A	マスク着用の徹底や給食時の私語禁止など、年間を通して指導を続け保健委員が呼びかけを定期的に行った。健康カードの記入は定着している。全体的には感染症対策への意識は高い。	長い期間マスク生活が続いているが、油断せずこれまでと同様に対策を行っていく。また、委員会活動など、生徒同士の声掛けの効果が高いことが伺えたので、生徒の主体的な活動を推進していく。	A	学校はコロナに対して正しい対応をし、生徒・保護者もしっかりと感染予防をしていることが、生徒・保護者アンケートの結果にでている。学校運営連絡協議会の報告でも「命を守る行動」の取組と成果を聞き、感心した。	引き続きコロナ感染症対策の給食のやり方を継続する。感染症予防対策も期間が長くなっているが、緩むことなく、粛々と「命を守る行動」を継続し、生徒と教職員がお互いに励まし合いながら、この事態を乗り越えることで、自分と他人の健康を守る態度を養う。
			生徒に寄り添う指導を継続しながら外部機関と連携をし、不登校生徒と家庭の支援を組織的に行う。	A	頻りに家庭連絡・訪問を行い、担任だけでなく、全教員やスクールカウンセラー等が関わり、指導することもできた。情報は組織的に共有されている。ふれあい学級や教育相談も活用できた。小中連携では情報交換を定期的に行っている。不登校の改善は数字上はできなかったが、学校とつながっている。	今後も全教職員が不登校生と関わりを組織的に、様々な関係機関と連携しながら個に応じた指導や、相談を継続する。	A	家庭訪問等を担任以外の教員も行った。スクールカウンセラーや特別支援委員会等と連携したりする取組は素晴らしい。特別支援委員会の取組についても報告を聞いている。様々な外部関係機関と連携できていて大変好ましく、安心できる。	引き続き学校と家庭との連絡を密にとっていくように工夫をしていく。ICTの活用により、生徒に課題等が学校から定期的に伝わるのが可能になった。また、ふれあい教室やサポート校で居場所をつくった生徒もいる。外部機関との連携をさらに深め、不登校生徒と家族の支援を継続する。
			生徒会活動等の生徒の主体的な活動や行事等を通して、生徒の居場所づくり、きずなづくりを推進する。	B	生徒会が球技大会を主催したり、挨拶運動に取り組んだりして、生徒のきずなづくりを推進している。学校に楽しく登校している生徒は9割に達し、学校生活に充実感を感じている。	学校生活をよりよくする方法を生徒自身に考えさせ、生徒会が中心となって主体的な活動が展開できるよう方策を検討していく。	A	生徒会活動が活発に行われているのがわかる。生徒アンケートにおいて、「生徒の間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり広げたりできている。」と感じている生徒が上昇している。A評価が妥当。	生徒が主体的に考え、体育大会や芸術発表会や球技大会等の活動を行うことができた。また、ICT機器を活用することで、生徒が全校生徒の意見を集約することが可能になった。さらに生徒の主体的活動を奨励し、居場所づくり、きずなづくりを推進する。
地域に根ざす学校	地域から信頼される学校の推進	学校を地域に開き、地域の人材を活用しながら教育活動の充実を図る。	B	HPを積極的に活用し、情報公開を行うことで、教育活動に真摯に取り組む生徒の様子を保護者や地域の方々に伝えることができた。	今後も積極的に生徒の様子を伝えることで地域の関心を高め、開かれた学校づくりを進めていく。	A	感染症対策のため、学校に行くことができなかったが、学校だよりやHPから学校の様子がよくわかった。保護者アンケートにおける93%の肯定評価が全てを物語っている。A評価が妥当。	コロナ禍で学校公開等が中止になってしまったが、オンライン配信を活用することができた。保護者・地域の皆様が教育活動を直に御覧いただけなかったのは残念であるが、今後もHPや学校だより、オンライン等で広報の充実を図る。	
		地域とともに、安心安全な学校づくりを推進するために、学校の新型コロナウイルス感染防止対策を地域に周知し協力を仰ぐ。	B	行事に地域の方々をお招きすることはできなかったが、学校便りの配布などを通して学校で取り組んでいるコロナ対策などについてお知らせすることができた。また、地域の老人ホーム「安らぎの家」とはオンライン交流や作品の共同作成などを行った。	「やすらぎの家」との交流については多くの生徒が興味を持ち、折り紙で梅の花を合計108枚折り、届けることができた。非接触でできる交流を模索してこれからも工夫を続けていく。	A	保護者アンケートにおける98%の肯定評価に加え、地域の高齢者施設とオンライン交流をしていることは素晴らしい。A評価が妥当。	新型コロナウイルス感染拡大防止対策を徹底した結果、学級閉鎖等の感染拡大をすることなく1年間を送ることができた。新年度でも緊張感をもって対応を継続し、地域の皆様にも理解を仰ぐ。	
その他重点	推進 特別支援教育の推進	生徒一人一人の特性を理解した指導を行う。	B	教育相談委員会が定期的に行われ、生徒の情報共有を確実にしていた。特別支援教室巡回指導教員と連携を図り、課題解決につなげることができた。生徒理解や外部連携について周知徹底できた。	引き続き、教育相談委員会の定期的実施と情報交換を行っていく。また職員会議等で情報共有を続けていく。	B	先生方の話から、生徒理解のために力を尽くしていることがわかる。一人一人の特性を理解するために外部機関と連携したり、教員間で共通理解を図ったりしていることは評価できる。	来年度も週一回の相談部会、月一回の校内委員会を確実にし、生徒の情報収集と、対応の検討、実践をする。SGIによる面談や、「SOSの出し方」の特別授業などSGIとの連携により、生徒の心の成長につながるように、指導体制を整えていく。	
		働き方改革における推進	B	支援員の活用方法を分かりやすくしたことで、教員から仕事を頼む姿が多く見られ、校務改善につながった。定時退勤推奨日を推進することにより、在校時間を意識する教員が増えた。	校務支援システムの運用方法が決定すれば、校務改善は図られると思われる。今後、校務支援システムの研修を行いながら、校務改善を図り、生徒と向き合う時間や教材研究の時間を確保していく。	B	教員も一人の労働者であり、より良い労働環境が求められる。香味改善の意識をもち続けることは大切である。校務支援システムを活用しさらに校務改善を図ることは、生徒と向き合う時間増につながると思う。	校務支援システムは、毎日利用するような機会を増やし、さらに活用を進めていく。教員間の連絡や配布文書はシステムの掲示板機能を活用し、ペーパーレス化を進めていく。今後SSS等積極的に活用し業務改善を図り、勤務時間外の労働時間を減少させる。	